

親父に教わった100の考え方

その4

高校3年生の時の事。

クラブとアルバイトに明け暮れ、夏休みの課題を残した。そこで、2つ下の妹にアルバイトで稼いだお金を渡して宿題を頼んだ。私より出来の良い妹は、「勉強の予習にもなるし」と、お金をもらった嬉しさで、怖い兄貴が頭を下げてくれたことに気をよくして引き受けてくれた。私はラッキーとばかりに、そのまま宿題を提出した。夏休み明け、さっそく担任の先生から職員室に呼び出された。「これ、お前やってないやろ。字が違う」。ばれたかあと、と頭を下げる私に、「お前の親御さんに報告しとくから、怒られてこい」と、あきれた様子の先生。帰宅すると、親父が椅子に座って待っていた。怒られるのを覚悟して、「すみません」

と、親父の前に正座した。

すると、「人間、得意、不得意、向き、不向きがある。でもな、めんどくさがるな」と親父で、次の言葉に驚いた。「妹にやらせたらしいなあ。それは褒める」。「えっ」と呟いた私は、心中でそこが一番アカンところやと思っていたのに……。親父は「お金を払って妹に頼んだんやろ。妹も喜んで引き受けた言うとな。一番あかんのは、めんどくさいと、あきらめて何もせんかったことや」。意味が分からず、親父の次の言葉を待った。「今回の一番の失敗は、宿題の確認をせんかったことや。字体が違う事は一目瞭然や。そこをしっかり確認したら良かったのに、頭隠して尻隠さずや」。親父の発想に唾然とした。

めんどくさくてもやる、お金を使ってもやる

「お前が社会人になってからでも、得手不得手は出てくる。不得手な部分は専門家に任せたらええねん。その代わり、ちゃんと報酬は払わなあかんぞ。お前の得意なことはお金をもらってしたらええねん。それが世の中の経済、うもんや」

「ほほう」。私は心の中で感動した。「面倒で辞めるよりも、どうしたら出来るかと色々

な方法を発想するんや」と、親父は部屋を出ていく間際に「そうや、先生には親父にめっちゃ叱られたと言うとけよ」と一言残して仕事に向かった。

社会人となって今、よくあの時のことを思い出す。私の周りにもめんどくさいからやらない人がたくさんいる。もったいないかと感じる今日この頃である。

大東市 潤吉